



第1分科会

人権確立をめざす教育の創造

第8分散会

I はじめに

分科会の基調は、討議課題と協力者から自身の経験をもとに提案された。

「できること」と「できないこと」ということに関わって、「できないことは悪いこと」とか「違うことはよくないこと」ということを教職員が学校の中で無意識に刷り込まれ、結果としてできなさを抱えた子どもたちを追いやってきたという面はないか。障害者権利条約では、インクルーシブ教育は基本的な人権である、インクルーシブ教育は、目的であるとともに、共生社会をつくるための手段だと言っている。その実現のためには、今の学校の文化・方針および実践の変革を伴うとも言っている。これは、部落差別も、外国人差別も、性的マイノリティーへの差別も、その他の人権にかかわることの全て、当事者の努力で解決する問題ではない。マジョリティーの側、私たち一人ひとりの課題だとの捉えが必要である。こういった視点に立って、“事実”と“実践”に基づく議論をし交流を深めたいと、呼びかけられた。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—③

登校が難しい訪問学級生と校内生を互いにつなぐ
(香川県同教)

—主な質疑と意見—

福岡 取り組みが形で終わらず、どのようにして、子どもたちがつながることの意味を自分たちで考えるようになっていったのか教えてほしい。

報告者 12年間という長い時間をかけた関わりである。小学部低学年時は訪問生のことを校内の子どもたちにも先生たちにも知ってもらおう機会が少なかった。等身大の人形を作ったのは5年生の時。人形を作ってみると、子どもたちは一歩引くという感じでなく、会えた喜びをみせ、人形を持って追いかけてごっこするなど楽しみながらスタートした。本人たちは学校に来ていないが、等身大の人形が教室にいて、常に目にする所に友達がいるという日常が意識づけになった。中学部になって、移動授業の際には人形と一緒に移動したり、学習したり。リモート授業がスタートして本人に実際に会えるようになり、校内生の中でリアルにつながるようになってきた。その関わりは職員にも広がった。

熊本 訪問生の二人が高等部卒業後はどんな生活をしてほしいか。脳性麻痺の友人が「おまえは障害児教育ではなく、障害者差別をなくす教育をしてくれ」と言う。二人の将来の姿、障害者に対する差別にいてどのように考えておられるか。その状況についてどうしてこうと考えておられるか。

報告者 高等部3年生は、卒業後に向け現場実習をしている。二人も卒業後に向け活動している。自分らしく過ごせる居場所が必要になる。それぞれの子どもが持っている力を発揮できる場所を保護者、本人、職員、地域の方々、いろんな関連機関と相談しながら進めている。ももこさんの場合は外に出るのが厳しいので自宅で過ごすことになると思う。二人の今の担任に説明してもらう。

香川 ももこさんは卒業後は在宅で、介護サービスを利用して生活することになる。卒業後もいろいろな人と関わり刺激を受ける中で、世界が広がり楽しめたらと思う。あきらさんは、生活介護の施設でお世話になる予定。いろいろな人と関わる中で生活が豊かになってほしい。

大阪 正直「人形かあ、本当の人間じゃないし」という思いがある。人形を作ろうとしたときの保護者の思いはどうだったのか。

徳島 保護者がどのような願いや思いをもってこの支援学校に来たのか。子どもの将来にどのような思いを持っているか。

報告者 初めて人形ができたときの保護者の思いを当時の担任に聞いた。二人の母親はともに、学校になかなか行けないので、人形をとおして関わることを喜んだ。小学部入学の頃は体力的にも大変で、保護者もまだまだ先が見えない中だった。その後いろいろな関わりをもち、つながりが広がる中、我が子の表情の変化などをとおし、母親自身も人と関わる楽しさや喜びを感じとったと思う。人とのつながりを卒業後も広げていきたいと保護者は言う。訪問だけ、家の中だけでは経験できなかったことが沢山ある。卒業後も人とのつながりをつないで生活を豊かにしていきたい。そのためには、いろんな人に二人を知ってもらい、いろんな関わり方をしてもらえるようにしていきたい。

三重 特別支援学校高等部の訪問生の担任で、学校の生徒とつなげることを課題に取り組んでいる。リアルにつながったということが大切で、周りの子どもたちの二人に対する視線がお人形さんという存在になってないか心配。

報告者 小学部から関わっていることもあり、自分の友だちとして関わっている。実際にリモート学習やスクーリングを重ねていく中でリアルな友だちとして存在を感じるようになってきた。今は、実際に会える喜びが強くなっている。人形をかわいがり対象としてみていることはないと思う。

福岡 人形を作る取り組みが、他の訪問生への取り組みに広がっているか。

報告者 今、この高等部の2名の生徒しか在籍していない。以前、小学部に訪問生がいたとき、保護者

が率先して人形を作ったことがあると聞く。
大阪 支援学校の子もたちと周りの小、中学校の児童・生徒との関わり、交流はあるか。

報告者 交流学習をしている。小学部では地域の小学生に来てもらい、高等部では近くの高校と年1回だが交流し、お互いを知ることをしている。

熊本 保護者はどこかでマイナスの選択をさせられているのでは。ある母親は「この子が産まれた瞬間から、おめでとうではなく、こういうふうで(障害があり)こっちはですよ(こういう施設がありますよ)」と、そんな言葉を浴びせられたと言う。将来在宅で過ごす事を本当に望んでいるのか。それとも、現状ではそれしかないと考えているのか。本当の保護者の思い、そして大事にしたいのは本人の思い。意思疎通ができないようでも表情や体の緊張が和らぐことでわかるのではないか。

報告者 現担任から現在の状況を報告してもらおう。
香川 母親にはいろいろな思いがある。在宅になると、自分たちが出かける時間もない状況がある。預けたいという気持ちもある。医療的ケアもある施設が限られている現実もあるが、近くに保護者がいなかったり、医療的ケアが母親でないと本人の体調が悪くなるなど難しい状況があり、他の場所に任せきれないというのが現在の母親の気持ち。本人の様子を見ていていると、母親が観てくれる慣れた環境の家が一番安心できると思う。

—報告2—③⑥

知れなくても知ろうとする (大阪府人連)

—主な質疑と意見—

協力者 Aの家族構成は？

報告者 母、本人、姉、弟。

協力者 Aはクラスでどんな風に見られていたか。

報告者 最初「根はいい子なんやけど」と言われていたが、迷惑がられるところもたくさんあった。

協力者 Aは数ヶ月かかって変わっていきが、どんな感じで接していたか。

報告者 私は2年生からの担任で、Aのことを全然知らなかった。Aがクラスの子と揉めて階段の踊り場でうずくまっているとき、別のクラスの子がAのそばにいた。声をかけるわけではなく、ただそばに居るだけで、Aがとても安心して感じた。そこからAのそばに居るとい関わり方を増やした。

協力者 全力でサポートするとは、どんなことか。

報告者 報告校の教職員は空き時間に教室に入って、子どもたちと一緒に困っている子を助けている。そのときにAに「ここ書くんやで」とかの声掛けを横でしていたが、Aは不安だったのだと思う。自分のしんどい思いを誰にも打ち明けられないでいると感じた。「なんかあったら、いつでも言うんやで。先生、わかろうとしてるからな」ということを全力で伝えるという意味で、全力でサポートと書いた。

福岡 A自身は自分の困り感を打ち明けることをどう考えているのか。

報告者 そのときのAは自分の思いを言葉にする

ことが苦手で、自分が何に困っているのかもわからない状態だった。だから、Aの横にいて「どうやあ」と話かけ、ずっと黙っていたらAが自然と話してくれていた。勉強については「いやな思い出とかあったん？」という言葉がAに響いたと思う。それまでは「テスト何で受けたくないん？」だった。質問としても答えやすかったのだろう。

福岡 学校ではスマホありか。

報告者 スマホはなし。怒っても子どもたちには利かない。報告校では「子どもの成長を信じる」ということを一番に考えている。卒業の時にはスマホを触らなくなったり、授業は座って聞かんといかん自分から正した。子どもたちの言葉でビックリしたのが、「自分で成長できた」「私はまだ成長したい」という言葉。自分の意思で成長していきたい、頑張りたい、人に頼るだけじゃないということを身に付けることにつながったと感じた。

大阪 Aが家庭のことを話すことはなかったのか。保護者が変わっていく姿は素晴らしいが、その前段階での保護者の姿を教えてほしい。

報告者 2年生最初の家庭訪問も出来ず、電話対応もなかなかできなかった。どうしようかと思っていた時、Aの弟の小学校で懇談会があると聞き、その懇談の日、母親と初めて会えた。母親はAの成績が悪いことをとても気にしていた。私はAと関係ができていく中、母親のことがとても好きなAの思いが伝わってきた。母親に、Aが頑張っている様子とそのことを伝えた。そこから急に空気が変わった。眼鏡があるともっと勉強頑張れるとか、成長して制服も大きいものがあつたほうが良いと話す時、「すぐ用意します」と母親は返した。そこから母親とやりとりができるようになった。

熊本 経済的に厳しい状況があるのでは？どんな暮らしぶりなのか教えてほしい。報告者が部落問題とどんな出会いがあり、どんな思いで部落問題学習に取り組んだのか。自身の部落問題認識をお尋ねしたい。

報告者 弟の面倒をAがみるが多かった。朝起きられない弟を起こし、一緒に小学校まで行き、遅刻することも多かった。母親は遅くに働いており、晩御飯は用意していたが、午前中は寝てることが多い。姉はバイトに行くことが多く、Aが家のことをメインにすることが多かった。経済的には、母親は「それぐらい言ったら買えるから」と夏休み前の面談の時に話していた。その後、眼鏡のことを話したとき「すいません、時間がね」と言っていたので、時間をつくるのが難しい現実が大きいように思う。部落問題については、今現在も差別があるということも分かっていない状況から始まり、知ること子どもたちは辛い思いをするのではないかと思っていた。子どもたちと学ばなかつた、これは今伝えなくてはいけない事だと分かった。高校に行くと部落問題学習をしないかもしれない。中学に在る間に、同じ校区の仲間と学ばなかつた、自分の味方が居る、協力して立ち向かえる、先代の人たちの学びを

活かすことができる。将来幸せに生きていくための力を付け、子どもたちを守る授業をしなくてはと感じた。それは様々な人権問題の学習につながる。まさに A の感想の「知れなくても知ろうとする」はたくさんのことにつながると思った。

協力者 A の「知れなくても知ろうとする」はどのように受け止めているか。

報告者 A の自信のなさから出た言葉だと思う。知りたい気持ちはあるけど、俺は知らないという気持ちがある。でも、知ろうとすることが大切だということを言いたくて、この感想を書いた。このときの部落問題学習の授業は大切だった。

協力者 報告者にとっても重い言葉か。

報告者 この子どもたちと出会い、2年間を通して、この言葉が、自分が一番してきたこと。そして、しないといけないこと。今、同じように勉強しなくて寝ている子もいるが、その子も本当は違う思いを持っているのではと思い、話を聞くきっかけになっている。卒業生たちの成長から、この子たちも成長していくと、より信じられるようになった。

徳島 地域のことが気になる。地域の人たちをどう巻きこんで地域とどう連携しているのか。

報告者 小中連携をしている。小学校では地域を好きになるという取り組みをし、中学でも校外学習で地域巡りをして地域の人たちと交流する機会をつくっている。地域が好きになったとき、「うちの校区、いいとこいっぱいあるやん。なんでそんなことされるん？」というのが部落問題の学びのきっかけになる。「私ら知ってるけど、ほかの人たちはその魅力を知らない。だから、差別が起きるのかもしれない」という考えに卒業生たちはなった。自分の育った地域を好きになる、そのために地域を知るといことはどの地域でも大切だと思う。

大阪 今、部落問題を語る事が難しくなっているなか、学校の体制が素晴らしい。部落問題を語るに、被差別の側に立たない教員が多い。子どもたちに問いかけると同時に自分自身にも問いかける必要がある。

大阪 部落問題学習、そのときの子どもたちの姿をおして、報告者が学んだこと、これからの子どものことを知っていかなければいけないと思うことを教えてほしい。

報告者 学んだことは、知らないことのほうが幸せだと思っていたこと自体が無意識に差別していると感じたこと。かわいそうなことじゃないということ。部落問題学習をすること自体がやりにくく感じることも無意識に差別しているのだと気づいた。今の子どもたちは自分がどう見られているのかとか、相手はどう思っているのかを考えるのが苦手な子が多い。部落問題学習をすると、「おかしいやん」と子どもたちは言えるようになる。そうなったとき、周りの子たちに、家族に、先生についても知っていかうとつながっていくと思う。

大阪 連携する2つの小学校のうち一つは被差別地区が校区で部落問題学習をしていて、もう一つ

の小学校ではどうだったのか。そして、連携はどうされていたのか。

報告者 今後、報告校は小中一貫校になる予定で、部落問題学習は両方ですることが課題。最初に出会った子どもたちは、学びのこまやかさに差があった。小中一貫の会議でその点も合わせている。

— 一日目・総括討論 —

熊本 大阪の報告を聞き、学ぶきっかけをどうしたら作れるか考えた。自分の地域の特色を知り、なぜ差別されるかを考える。子どもたちには自分から学ぶ姿勢が必要だと思うので、その足掛かりをつくる教育をしていることが凄い。2本の報告を聞き、1人だけでなく、学校全体でやっていくこと。人形作りも不安ながらに提案され、取り敢えずやってみようとしていく。その後結果を振り返りながら次出来る取り組みを前向きに考えていく。その姿勢を持ち帰りたい。

大阪 報告校の校区に地区を有する小学校に勤務している。ムラの人たちの願いで出来た学校。部落差別はまだある。本校では子どもたちが地域を好きになるように1年生の時からいろんな施設に行き、地域の人のお話を聞いている。差別に遭った時に、「なに言うてんねん、うちこんないい地域やねん」と言えるように育てておくことが大事。実際、差別は厳しく、差別の根深い負の連鎖が続いている。子どもたちには、そういう実態があっても、地域の人たちがしっかり支えてくれていると感じられることをめざし、差別に負けない教育をしている。生徒指導の話があったが、本校でも遅刻した時、まず「よく来たなあ」と言う。子どもは責められないと思えば二コツとする。遅刻は多いが、それは保護者が遅くまで働いていて、朝起きられないから。それ子どもの責任ですか？「よう来たなあ」と言うとも毎日でも来る。欠席者は少ない。子どもたちの置かれている実態、背景を知って、子どもたちに声をかけ関わっていくことが大切。そのなかで少しずつ子どもたちの心が和らいでいくと感じる。

鹿児島 鹿児島でも子どもの居場所が話題になる。A にとって報告者が居場所になったと思う。物理的な場所が必要な子どももいる。被差別の状況におかれている子どもたちにとって話を聞いてあげられる時間だとか、雰囲気、場所が必要になっている。空き時間を利用して子どもたちの話をゆっくり聞こうと思うがなかなか思うようにいかない。人的保証が難しいのが現状。居場所作りの取り組みが聞けたら嬉しい。

大阪 会ったこともない人を想像することは子どもたちには難しい。そのきっかけとして人形を使われたのは良かった。そして、支援学校は広範囲から子どもたちは通ってくる。本来なら地元の小学校や中学校に通い、そこで交流できたらいいと思う。保護者もそう思っていたのではないか。支援学校で小学部、中学部、高等部と卒業した後は、地元に戻っていくわけで、そこで子どもたちがどう過ごし

ていけるかと考えると、地域のつながりがあれば子どもたちのつながりも広がっていく。地元の学校で受け入れられなかったのかと考える。訪問することができたりしたのではと考える。地元の学校で受け入れる責務があると中学校の教員として考えた。

兵庫 先日、小学校の先生から「ぼく」と言っている小学1年の女の子のことで、将来いじめられないか心配だと話があった。私はその先生に「周りの子がいじめないような子につくってください」と話した。また、その会で、性別は本人が決めると聞き、納得した。差別は周りの人の問題である。「差別しない子をつくってください」と先生たちをお願いしたい。

報告者(大阪) 異動したときにどういうことができるのかなと考えている。今向き合っている子どもたちが将来幸せに過ごせるようにと思うと、部落問題学習を異動先でもしていきたい。今やっている地域学習は他の学校でもできる。その地域学習から部落問題学習につなげることができる。「自分のとこってこんな歴史があって、こんな人があったんやあ」「じゃあ、この部落差別ってどう思う?」「じゃあ、差別するのっておかしくない?」と、つながっていく。

大阪 保護者と関係を築こうと、一升瓶持って一晩公園で飲んだこともある。人が居場所だと思う。そういう関係をつくるのが居場所作りだと思い実践してきた。今日の報告 2 本とも人を知ってこうとする実践。どんな差別問題もその人のことをあまり知らないのに、周りの大部分の情報から勝手に差別している。その人のことを知ろうとする子どもを育てれば、いずれいろんな差別問題はなくなっていくと信じている。今は、校長として「帰れ、帰れ」と教職員に言わなければいけない立場だが、言いながらも心の中では「違うんや」と葛藤している。悩んでいる。

協力者 私が同和教育をはじめたとき、「仲間づくりに始まって、仲間づくりに終わる」と先輩に言われた。また、「考えるな、動け」とも言われた。考えはあとからついてくる。やっていくうちに、「知る」ということを知った。知れば知るほど関わりたいとか、近づいていきたいと思ってやってきた。

大阪 以前、報告者(大阪)の中学にいたときに卒業生(2014年)が書いた言葉を読む。「後輩に伝えたいことば… なにもかも当たり前ではないということ、この中学の私たちも多くの人に支えられていまここにある、感謝の気持ちと思いやりの心を忘れない、正しい知識を身に付けること、何も知らないということが人を傷つけることもある、…」今の若い先生たちも同じ様な言葉を子どもたちから引き出してくれていることがとてもありがたい。

大阪 印象に残った言葉、「社会と人との関わりをつないでいく」。これができていくことが子どもたち、そして保護者にとって居場所になると思った。2 本目では母親が変わっていく姿がとても印象に残った。母親と子どもを報告者がつないだ。私が若い

時に先輩に言われたことが、「想像力をもて」。「なんでそんなことするんや?」ということ。そのきっかけが、外国人の子に対する「○○に帰れ」という差別的な発言があった時。えらいことが起こった、これは差別発言だから対応せなと思った時、先輩の先生が「なんでそんな発言したか聞いておいで。言われた方に、おまえどう思ったのか?聞いてきなさい」。これ大事だと思った。これで家の人とも、子どもともつながった気がする。想像する力を今後も続けていきたいと感じた今日の会だった。

福岡 私の学校は重度重複障害を持つ子どもが多い。地域の小学3年生と交流学习をして楽しく遊んだとき、担任が関わるときとは全然違う笑顔をその子たちは見せた。集団の中で育つということは重度の障害を持つ子どもも変わらないと実感した。そのとき差別発言があった。無知からくる言葉だった。そして今年あまり楽しくない交流学习だった。何故か?先日、その小学校の先生たちと反省会をして、疑問が解けた。今年、失礼なことはしてはいけない、差別発言は繰り返させないということが一番にその小学校は取り組んでいた。子どもの感想の中に、「仲良くすることができた」というよりも、「失礼なことをせずに」とか「○○してあげることができた」とかの交流の雰囲気とおりの感想があったようだ。そのことを重ねてつながりの良さは何かと考えていた。一緒に楽しむにはとか、みんなが笑顔になるにはとか、その視点を置き去りにして、教師のこうさせなくてはならないが先にきてしまうと、温かいつながりや、報告にあったような子どもの変容はないのではないかと感じた。

熊本 重度の障害を持つ子どもを地元の小学校に迎えた経験がある。親は最初、地元の学校にやらないと決めていた。私は何で選んでももらえないのか気になり何度も訪問した。母親は「うちの子は養護学校(当時)に決めてます」としか言わない。何度も訪問するうち、「同じ年の子が周りで遊んでいると、とても表情が変わるんです」と話す。その後続いた言葉が「でも、うちのような子は地域の学校に行ってはいけないんでしょ?」。「うちの子は養護学校に決めてます」という言葉は親の本当の思いではなかったことに気づいた。それから当時の職員と一生懸命迎える準備をした。そこから親の思いにこだわることを大事にしている。今、児童支援加配という仕事をしており、19, 20 才の教育実習生に、「小学校時代の人権学習で何覚えてる?」と聞くと、ほとんど覚えていなかった。とても衝撃で、教師の『子どもたちに教えなければいけない』という発想だったからかと問うている。では、どうする?先輩の先生から「まず授業者がどの位置で授業をするのか、自分自身の生き方を示すところから人権学習は始まる。自分を差し出すことで授業は成立する」と言われた。

協力者 人権学習をするときは構えてしまうことが多かった。教え込むということがずっと続いてきて、自分の問題として考えたときそれでは伝わらない

という体験はみなさんされているのではないかと思う。自分事に落とし込むということ、自分のことを語るということ、そしてそれは無意識にバイアスをかけていたことをはずすということからスタートするのだと思う。

大阪 前任校で、体は男の子だけど気持ちは女の子という子がいた。制服はスカートだったが、スラックスもよしにしようと職員に投げかけた。いろんな反対があった。なぜダメなのか考えると、大人の〇〇すべきが子どもたちの生き方の大きなブレーキになっている。協議しながらスラックスを認めた。その後大きな問題は起きなかった。2年後、体は男の子だけど女の子になりたいという子どもが来たときも同じ様な経験をした。一回チャレンジして、修復しなければならないところは出てくるが、子どもたちのこうしたいという思いや願いを叶えていく中で豊かな社会が生まれると感じている。

協力者 この分散会の基調にあった「できることはよくて、できないことは悪い」そういう尺度をつくっているのは誰か？「いい」とか「悪い」とか、二項対立で白か黒か決めたいがるが、教育現場も地域も白黒じゃないグレーな部分がすごく多い。そのグレーな部分をどうする？と課題にして自治の力を付けていくのも人権教育だと思う。

大阪 4年生の子どもたちと部落問題学習をしている。部落問題学習は地域学習だと感じている。子どもたちと地域をつなげることはとても大切。でも、哀しいかな私は勤務が終えたら地域を離れる。自分自身が地域の人たちとつながらないといけなさと感じ、今、地域の青年たちとつながることを心がけている。つながりができると、一緒に子どもたちの話ができたり、お互いの活動に気軽に参加し合ったりする。そういう私を見て、子どもたちも先生も一緒だと感じてくれる。私の学校にも生活にたくさん課題を抱えた子どもたちがいる。自分が何とかしなきゃと思い、なんともできない自分にしんどくなることもあったが、自分だけではなんともできないと子どもの姿から学んだ。学校と社会がどうつながっていくかということのをこれから考えていかなければいけないと思っている。学校でできることは必至で頑張る。それは子どもとつながっていくこと。できないことは、どうやったら可能になるかを明日も来てみなさんと一緒に考えたい。

— «2日目» 1日目の振りかえり —

協力者 2本の報告をもとに、総括討論を行なった。キーワードは、つなぐ、つながる、つなげるということが、2本の報告の共通した言葉だった。一人の子どもを真ん中において、その子と他の子どもたちをつなぐ。その子と家族をつなぐ。その子と社会をつなぐ。それを行っていくためには、相手を知らなければいけない。知るためには、聞くことが大切。親の思い、子どもの思いを聞くということ。ただ、聞くというのは、「あんたどう思ってるの？」それだけでは絶対聞くことができない、話してこない。だか

らこそ、聞ける関係をつくる。その関係性づくりの取り組みが大切だという話があった。そして、聞くためには自身が語らなければ、本当のことは聞けない。自分自身が自分の暮らしや家族や生き方を語る。それを聞いた子どもが思いを語ることにつながる。それが連鎖してつながっていくというような話があった。2つ目のキーワードは居場所づくり。課題の多い子どもたちが安心できる場所、これは物理的な場所ということもあるし、安心できる時間ということもある。居場所の人という発言もあった。聞いてもらえて、自分のことを知ってもらえて、自分のことをわかってもらえたという安心感、その安心できる人になる。それから、こうあるべきということを教え込もうとしても、それは伝わらないという発言もあった。そして、地元の方から、「差別は周りの問題や。だから差別をしない子どもをつくってください」との発言があった。その言葉を改めて自分の問題だととらえ、自分自身が差別と闘う人になっているのか、ということ問い続けなければいけないと感じた昨日だった。

— 報告3—④

「手話があったほうが嬉しいでしょ。それがわかって嬉しかった」

(鹿児島県同教)

— 主な質疑と意見 —

鹿児島 難聴学級ではどのようなことをしているのか。かいとの6年生の一年間の報告を聞いて、月を追うごとにポジティブに自分を前に出していく様子が伺えるが、5年生の時はどうだったのか。そして、なぜそうなっていったのか。

報告者 難聴学級では聴覚障害に関する自立活動の授業がある。指文字や手話の他に、彼の場合は聴覚口話法の練習をしたり、発音の指導をしたり、彼に合った授業をした。6年生なので、福祉とつなげ、実際に自立活動につなげていくことをした。彼は何をすればいいか分れば一緒にできる。けれど、よくあるパターンだが、子どもたちは良かれと思って先回りをする。してあげる、してもらって関係性が4月に会った時あった。そういう関係性もあり、彼がやりたいことを言える状況でなかった。4月の綱引き大会の時、彼は自分の気持ちをみんなの前で、「リーダーやりたいけど」って言えない。私は、「けど」の先は先生と一緒に解決するから「やろう」と声をかけてきた。綱引きのリーダーをしてからは、彼は自分のこうしたいをちょっと言えるようになっていく。すると、彼の心の中が少しずつ見えるようになり、本来彼が持っている面白い部分が出てきた。その様子を見たクラスの子も子どもたちが私のクラスに来て「先生、かいとがこんなことしたんだよ。私たち嬉しかった」と言った。それが最初の学級の変化。それまでは何か決めるときに周りの子どもたちは、何も彼に聞かない。9月、ある踊りの最後に一番上で「ヤァッ」ってやる係りを、周りの子たちが「かいと、やってみたら」って声をかけた。初めてだった。「やりたいなら、やりたいって言っていいんだよ」と

言った。そこに新しい関係性を築き始めていることを感じた。5、6年は同じ担任で、「5年の時はいなかったけど、6年にかいととは、そこにいるんだよね」と言う。担任も彼に対する感じ方・考え方がいろいろと変化があったと思えた場面だった。

福岡 私も良かれと思って対応しそうだが、教員として何を大事にしているか。彼と関わって何を学ばれたかが一つ。もう一つは彼だからここまでの変化が起きたのか。それとも小学校に在籍する全ての子にこういう変わる可能性があるのか。

報告者 彼の前にも難聴の子どもの担任をしたことがある。知らないことだらけなので、とにかく当事者に会いに行こうと決めている。それは本人や保護者だけでなく、聾学校の先生だったり、実際に難聴の方だったり。とにかく、当事者に会いに行き、当事者の話を聞く。社会の中にある当事者に辛い思いをさせているのは何なのかを知るということを大事にしている。私は小学校では歌うのが当たり前だと思う人間だったが、「先生、私たち聞こえないのに、歌えるわけじゃない」と当事者の大人方から言われて、なんでそれに気づかなかったのだろうと思った。いろんな人に会いに行くことで、自分のいたらなかった部分を相手が写し鏡のように写してくれて、それを普通の教育の中で活かしたいと考えている。全ての子に変わるチャンスはあるかと言う質問。すごく難しいことだが、私は「ある」と思う。それは今まで関わった子どもたちが、周りの変容によって過ごしやすくなることで、どの子どもも生き生きとしてきた。自分を出せるようになった。いろんな人と関わることに恐怖を感じなくなっていった。それを期待して関わっていきたい。

徳島 難聴学級の担任は自身の希望だったのか。初めて難聴学級を担任した時の思いを聞きたい。難聴学級の担任は特別な存在のように感じ、混乱もあったと思うだけに、どんなことが先生の救いや助けになったのか教えてほしい。つぎの人につながるようにという願いをもって質問する。

報告者 正直言うと希望していない。異動先で「難聴学級です」と言われた。それがスタート。今、希望を聞かれたら、ことばとか難聴とかの担当を希望する。でもそれは、知ったから。知らないから勝手に相手のことが霧の中にいる感じで、どうしていいか迷い、初めて「難聴学級」と言われた時の本音は「無理」と思った。多分初めて持たれる方は似たような感想だと思う。彼の担任をする前に、別の難聴の子どもの担任をした。そのとき、すごい失敗をした。その失敗から「この子にとって必要なものは何なのだろう」ということを、毎日アンテナ高く探ろうと思った。私を支えてくれたのは、鹿児島聾学校だった。専門機関に相談する。昔の自分は、何かに頼るといのはなんかへんなプライドがあったが、聾学校の先生に相談すると、相談先も含めいろいろ教えてくれた。その子にとって必要と思われる機関とつながっていくことが非常に重要だった。

徳島 組織づくりをする場合、「あなた〇〇ですよ」

では新しく来た人は苦しいものがあるかもしれない。「あなたのここがこうだからこの学級をお願いしたい」と話して組織づくりをしてほしい。

協力者 彼が進学した地元の中学校でも新しく難聴学級が創設されたのではないかと思うが、それにあたり取り組まれたことはあるか。

報告者 中学校に彼が進学したいと話をした当初は、ようこそという感じではなかった。それが5月。じゃあ、どうしようか？彼と一緒に、僕のことを知ってくださいというチラシを作ってその中学に持っていった。笑顔で「待っているよ」、「うーん」、先生たちの反応はいろいろ。だけど、難聴理解授業をしたり、職員研修をしたりしていく中でいろんな話をすればただで、先生たちが「かいとさんのために、こんな教室がいますか？」と受け入れ体制を整えてくれた。今も、中学校からわからないことがあると、私に連絡をくれる。

福岡 私も特別支援学校で、地域の学校に出前授業に行ったりするが、先生の難聴理解授業や職員研修で周りの人を動かすパワーがすごい。授業や職員研修で一番大事にしていることやここは分かってほしい点を具体的に教えてほしい。

報告者 大事にしていることは本人の思いを聞くこと。私は、「教育は基本、オーダーメイド」だと思っている。授業をつくる時、彼に「今度中学校に授業に行こうと思うけど、どう思う？」と聞いた。彼は「してほしい」「わかった。じゃあ、中学の先生に聞いてみよう」そして中学の先生と話して決まった。彼に「あなたが伝えたいことはなに？あなたが、これを相手がわかっていると安心だなと思っていることはなに？」と聞きながら、一緒に授業をつくった。その一つが指文字。みんなの名前がわからないから、自分の名前だけでも指文字でしてくれたら嬉しいという願いがスタートになっている。また、彼がOKしても必ずそれを保護者に見せる。保護者としてこの言葉は使ってほしくないとか、もっとこんな言い方のほうが伝わるかもなど、思うことを聞く。私以上に保護者のほうが彼のことをわかっているので必ず保護者に聞く。中学にも「この授業をさせてください」という言い方でなく、彼といくつか授業案をつくって提案した。中学校にもそれぞれの学級の実態がある。担任の先生がこれとこれをしてほしいというものをつなげて授業を作っていくというやり方をした。12月の授業に当たっては、9月から取り組んだ。その効果は、彼が「先生、中学校楽しいよ」と言うので、効果があったと思う。当時、「先生、授業してきてどう思った？どんな意見があった？」「こんなことみんな言ってたよ」と言ったら、「ああそうなんだ、じゃあ今度、僕手紙書くね」とか、そういう相互のやり取りを重ね、お互いの安心感を得られたことで、知らないことから生まれる相手を勝手にラベリングするような状況が少しでも避けられたかなと思う。聞こえないからこうしてあげるのがやささだよね、そこからの脱却というか、そういう効果はあったかなと思う。

—報告4—③⑦

私の知らない福祉の世界

～社会的に孤立させないために～ (大阪市人教)

—主な質疑と意見—

大阪 のぶが休んでいる時の周りの子どもたちの関わりがどうだったのか。のぶについてどんな話を報告者は朝や帰りの会で話していたのか。修学旅行の班決めとかいろいろあると思うので、仲間づくり点でどんなことがあったのか聞きたい。

鹿児島 私の勤める学校にも気になる子がいて、学校の中でそういった気になる子どもをどういうふうにケアしていくか、行政とつなぐか、福祉とつなぐかという話をしているが、なかなかうまく機能していない。報告からは、区がガッチリ関わっていて、区が中心となっていていろいろな所とつないでいるイメージが持てた。そして、担当の方々がつながりながら、子どもや家庭を支援している姿が見えたが、学校としてこの家庭を支援していこうというチームが作れているのか。学校の動きが知りたい。

大阪 元中学校の教員で、退職してから何年か小学校に関わった。小学校と中学校の違いは、中学校は空き時間があり、そこで担任が家庭訪問に行くことが可能だが、小学校は担任が5時間、6時間つきっきりなので難しい。でも、報告者の学校は、人権担当がフリーで動ける。それをどう生かしているのか伺いたい。また、地域との関係、運動体との関係についても伺いたい。

報告者 学級の関わりは、以前の担任、特に3年の担任の先生がのぶが休みがちになってきたときに、のぶもいるということクラスで話していた。のぶが来たときには楽しく遊ぼうぜ、と学校を楽しい居場所にしていこうと子どもたちに話しかけていた。4年の担任をした私のときは、のぶと1回しか会えておらず、連絡も取れず、のぶのことを知らなかったというのもあり、恥ずかしながらもできていなかったというのが実情。一方、子どもたちはのぶのことを気にかけていて、私自身、遠足でのぶがどの班に入るとか、体育のチーム分けの時ものぶが来たらこのチームねとか、みんなに相談しながら一緒にやっていた。子どもたちは、のぶは必ずいるもんやという雰囲気で作っていた。5年生になって、子ども食堂でのぶと会い出してから、私も状況が変わり、のぶと会えているという自信もあって、のぶがどういう状態か、たとえば身長がめっちゃ高くなるとか、そういう話をみんなにする場面を多く作っていった。子どもたちのほうは継続的にのぶはいるもんやと思ってやっていた。当時、母親が完全にシャットダウンしていて、学校としては、人担の先生のポスティングと特別支援学級の先生の電話対応しかなかった。電話代の支払いができず、電話もできないこともあった。学校の動きとしては人担中心に動いていた。管理職も入り、管理職、人担を中心に方針を決めて動いていた。地域は、元同推校ということもあり、地域は3小2中が協力校

で、西成教育サポート連絡会というのがある。週に1回程度、3小2中の先生と高校の先生、隣保館の方とで、校区の内情だったり、学校の様子だったり伝えながら、連携を取り合っている。

大阪 西成区は地域や行政をひっくるめて、非常に福祉に厚い、支援に厚い地域だと感じている。話に出た、毎月1回のケア会議では、何時間もかけて、各家庭の支援のあり方を考えていった。また、行政も、明日食べていくお金もない家庭もなかにあるので現金支給の制度があったり、家の中に清掃を入れたり、子ども食堂など、手厚い支援がある。そのなかで、のぶの母親とのぶが2年生まで私は報告校にいて、何度も母親と話をした。虐待通報を何回も受けているので、支援の手厚い福祉や行政につなぎたいと思っても、やっぱりそこはシャットダウンする。そこでキーパーソンになるのが、同担(人担)になってくると思う。自分もその立場だったとき一生懸命やった。まず、母親とつながって、今回言えば子ども食堂の方とつながって、母親と子ども食堂の方をつなげて、そこにデイサービスや行政をつなげて、のぶもそこに関わって行って、最終的に学校の方向に向いていくという方向性でずっと動いてきた。ただ、人が代わると母親との関係性をまた一からリセットというところがある。母親に入っていくのがすごく大変なので、深夜の対応も沢山した。長い時間話をすることもあった。自分は後任の同担(人担)につなぐことがなかなかできなかったのだが、同担からの次の同担へのつなぎはすごく大切になる。報告者は次の同担の人にどんな思いでつないでいきたいと考えているか。

報告者 同担(人担)の仕事。正直、担任しているとき、知らない仕事だった。同担の方々がいっぱい何かをしているとは思っていたが、担任業務が精一杯で、目を向けられなかった。子ども食堂の一件もそうだが、知らない世界がある。その世界のことを知ろうと思ったことが人担を引き受けた大きな理由の一つ。そして今回いろんな世界があることを知ることができた。つぎの人担も話し合いの中で決まっていくと思うが、多分今の状況では、人担の仕事を知らない先生が多いと思う。今後やっていこうと思うことは、今自分がやっている仕事と人のつながりをオープンにしていくこと。のぶの一件もそうだが、他の件も相談支援員の方が関わってくれている。ラインの交換に担任も入れるなど、担任も関わられるようにしていこうと考えている。地域の動きや地域と学校との関わりを、堅苦しい研修でなく、ちょっとどこかで伝えていこうと思っている。人担がしていることを全部担任に振ってしまうと、担任は疲弊する。自分も知らないところで助けられていたんだと知れたし、実際、今、担任から相談を受けたりしていて、家庭とつなぐ機関として、間に1個クッションあるよというのを伝えたい。それをつぎ誰かがしてほしいということも含め、大事な仕事なんだということ伝えたいと思っている。それは自分の使命でもあると思う。

— 二日目・総括討論 —

大阪 映画「かば」の時代、西成支部という運動体の方が障害者の保護者を立ち上げ、地域の運動となり障害者支援の会館を作った。会館の方が家庭訪問すると、家族そして子どもたちのいろんなことが分かってくる。そして地元の学校と連携して動いていく。そこから地域の流れができて来た。今は福祉も巻き込み、今日の大阪の報告につながったと思う。西成というのは、部落だけじゃない、全国からいろんなしんどい人が集まってきている地域。今は外国人も増えている。様々なことがあり学校内でも見えないことがいっぱい出てくる。それが見えてくる中で部落問題も見えてくる。それが今の大阪であり日本の社会ではないかと思う。

大阪 大阪の報告者の隣の小学校で人担の経験がある。今日の報告聞いて、子どもの思い、保護者の思いをすごく大切にされていると思った。これってすごく難しいことで、思いを大切にするとか、寄りそうとか、言葉では飛び交っているが、それを本気でやろうと思ったら疲弊してしまう可能性もある。今日報告した2人にはすごく強い思いが感じられた。そういう思いを持つにいたる自分の変容がどこにあったのか、何かきっかけがあるなら聞きたい。

報告者(大阪 報告4) 私は他人軸に寄りやすい人間だと思っている。なんでも寄りそってしまい、自分がしんどくなるタイプ。そのことに気づかされたのは、10年ほど前、特別支援学校で働いているときに、脳性麻痺の子どもたちに出会い、言い方悪いが、この子たちって人間なんや、と気づかされた。その気づきがあったから、この子たちが考えていることやできることにこっちが気づいてやらなあかんと思ったのが初めてで、そこから今回の件も接触してからは他人軸の入れ込みだった。のびのこと、のびのことと、頭がいっぱいだった。

報告者(鹿児島) その質問よくいただくが、私は「答えがない」、「自分もわからない」というのが答え。ただ、自分の生い立ちとか、自分が産まれた場所とか、歩んできた道のなかの出会いとかで、自分ももしもそのような動きをしているという風に受け取ってもらえるなら、幸せなことだと思う。

大阪 私が切り替わったのは、人との出会い。昨日報告の中学に教育実習に行った時に出会った先生。バスケット部の実習生として3週間いた。向かいで活動しているバレー部にベテランの顧問がいて、3人の女子の指導をしていた。全員、金髪。服装もくちゃくちゃ。その3人を顧問の先生が熱心に教えている。その子たちが顧問に暴言を吐く。「サーブとかバンツてやると痛いんじゃない、死ぬ」。その顧問の先生も「うるさいな」と言いながら熱の入れた指導をする。部活が終わりバレーの顧問の先生が教室に来て、開口一番、汗だくになりながら、「今日はいい練習だったあ」と言った。「死ぬ」とかボロカス言われてたのに、いい練習だったって？すごいなあと思っていると、バスケット部の顧問が「これが教育

や」と。エ〜!?だった。採用されてその学校に赴任したとき、そのバレー部の先生が転勤。あのバレー部の子たちがその先生を、ずっと呼んでいる。「あいつ、どこいったんや」。3人はその先生が異動した中学まで行って「〇〇先生おらんのかあ」と言っているのを見たとき、自分はこういう先生になりたいと思った。今40歳だが、後輩の先生方にこんな先生になりたいと思えるような自分になりたいと思う。一番自分が心がけているのは、アップデートできる人間になるということ。40にも、50にもなって、汗だくになりながら、暴言吐かれてても、真っ向勝負できる先生。

大阪 大学で部落問題の解放研に入っていた。そのとき先輩から、「あなたは被差別の当事者ではない。当事者とはまったく同じ気持ちにはなれない。でも、近づいていくことはできる」と言われた。自分自身の差別性に気づいていくことが、お互いにつながっていくことだと思っている。教員が教え込むとか、保護者をこうさせるとか、そういうことではなく、それぞれが歩む中でお互いに差別に向かっていくことが大切だと思う。

香川 特別支援学校の教員です。生まれつき吃音があって、子どもの頃まったく話せなかった。鹿児島の報告から自分の人生と重なる部分があった。一番のターニングポイントは中学生のとき。先生が、「学校は練習の場だから」と、「社会に出たらミスとかできないけど、学校は練習の場だから何回失敗してもいい」と言って、生徒会長に推薦してくれた。その先生のねらいは、人前で話す練習を積んで、場数をこなして、慣れていくことだった。一番大きかったのが卒業式の送辞を読んだときのこと。夜遅くまで練習に付き合ってくれて、当日まったく詰まらずに話せたことが、一番の成功経験になっている。第二のターニングポイントが就活。個人面接で言葉が詰まってしまう。苦労したが、就活の中で、ある採用担当者が、私の弟が吃音があるけど公立中学校の教師をちゃんとしていることを聞き、当事者にとっては、どんな励ましよりも事実がとても励みになり、教員採用試験に合格することができた。恩師のことや自分の体験を子どもたちに伝えていきたい。

報告者(大阪、報告2) なんて子どもたちに寄りそいたいと思うのか考えた時、中学の時のクラスにいたヤンキーの子を思い出す。3年生で一緒のクラスになり、小学時代仲良かったしなと思い、タバコを吸っているプール裏まで授業に呼びに行っていた。が、授業には絶対に来ない。彼は「行かん」と言うが、一緒にいたヤンキーの子が「呼びに来てくれるだけいいやん」と言う。私はそのとき「嬉しかったのこれ？」と思い、そこからさらにしつこく呼びにいこうになった。ヤンキーの中でその子だけずっと行事に参加してくれた。働く前、飲みに行った時に、ヤンキーの子が「俺、高校に行ったんやけど途中で辞めちゃったねん」「お前が授業とか行事とか誘ってくれたから俺、全部参加できた。あんど

だけが青春やった」「それで俺みたいなのがいたら分かってやってくれよ。そういう先生になってくれよ」と言ってくれたことが一番印象に残っている。今自分が先生として頑張っている原点です。

徳島 地域とつなぐという点で、民生委員・児童委員のことは知ってほしい。0歳児から高齢者まで、なかには亡くなったあとまで関わりを続けている民生委員もいる。その地域に住んでいるので、見守りが必要な子どもや家庭を、地域の一人として見守り、また情報があれば、私たち民生委員は身近な相談相手であり、つなぐ活動をしている。関係する学校とか子ども家庭センター、保健所、警察、包括支援センター、そういうところにつないでいく。

大阪 昨日の報告の中で、「知れなくても知ろうとする」ことはすごく大事だと思った。西成区の学校に勤めるまでは部落の存在も知らなかった。映画「かば」の中に出てくる場面は現在でも聞く。同担をしてそれを知れたことが良かった。6年生の担任のとき、私をどうしても受け入れてもらえず、いろんなことで私を妨害していると思う子がいた。メンタルをやられながらも負けるものかと思ってやっていた。卒業式の日、自分の机の中に手紙が置いてあり、「先生、今までごめん」みたいなこと書いてあった。本当に嫌いだったら無関心になると、そのとき気づいた。何かしら訴えるものがあり、それを自分が汲み取れず、わかろうとしてなかった自分を知ることができ、その後活かしている。

鹿児島島の報告の難聴学級のその子は原学級に在籍しているのかどうか。33、4年前のこと、小学5、6年のとき、補聴器を付けた女の子がクラスにいて、聞こえないってこういうことなんだと知ることができた体験がある。音楽発表会の時、良かれと思って担任の先生に「先生、歌やめませんか？彼女歌えませんよ」と言った。「私は歌えるから、大丈夫」ってあとから言われた。「あっ、これは違うんや」と、あとから気づいた。結果的には一緒にやることができた。そういう点で、原学級で一緒にやることのメリットがあるんじゃないかと振り返っている。そういうエピソードがあれば教えてほしい。そういうことをを知らない、それこそマイクロアグレッションじゃないが、これから、良かれと思ってやってしまうかもしれない。そのあたりについても教えてもらいたい。

報告者(鹿児島) 支援学級の在籍です。鹿児島県では交流学級と言っており、支援学級から交流学級のほうに行く。学校の中で聴力検査をするが、当たり前のように「はい、耳の検査をします」とかいうのは、「あれはすごく傷つく」と本人が言っていた。聞こえ方がそれぞれ違う。この子の場合は高い音が聞こえない。低い音が聞こえないという子もいる。高い音が聞こえないというのは、笛の音が聞こえにくい。だから、太鼓に替えた。人工内耳を付けている人だと、マット運動など、回転する動きがあると取れるからそれ外すので無音になる。なので、こうしたときは危ないといった事前学習的なもの

は必要になる。よく質問されるのが「どの教科を難聴学級で受けたほうがいいか？」。必ず答えるのが、「保護者と本人と話をしてください」。私がいた市町村は国語、算数を支援学級で受けることが多い所だが、国語、算数というくくりをするのではなく、その教科の中のその単元は支援学級ですとか、一つの単元でも基本的な所は支援学級ですとか、ここは一緒に勉強できるとか、そういうふうに保護者、本人、そして交流学級担任と話ながら1週間の計画を立て、これでどうかと進めていくほうがうまくいった。それ以外に避難訓練。あれは非常に本人たちが戸惑う。なので、避難訓練のときは、最低限の、たとえば、集まるとか並ぶとか、手話で区切り区切りを指示しておくことで、本人は安心してできる。入学式とか卒業式とでは、歌のことが出る。かいたの卒業のとき、本人に「どうする？」と聞いたら、「僕は歌えない」と言った。「どうしたい？」と聞いたら、「でも、僕はここは歌いたい」「あとはどうする？」「僕は口ばくをする」って。「いいんじゃない」と言った。ここを歌いたいというところや曲が転換していくところを、私が指文字とか手話で伝え、支援学級で練習する。視覚的なものがあると、更に分かりやすいので、音楽をするなら、楽譜をタブレットに写すとか、輪唱するなら色分けをすとか、今はタブレットや携帯などいろんなアプリがあるので、それを本人が使えるようになれば、一緒に参加して、一緒に楽しめるものもたくさんあると思う。

大阪 なぜ自分が今子どもの前に立って毎日一生懸命してるのかと考えた時に、いろんなこと教えてくれたのは、隣にいたあの子だったと思い出す。小学校の時、支援学級に在籍していて、中学校になったらいなくなった男の子のこと。中学生になり「私、部落やんねんけど、友だちになってくれる？」と言ってきた子。なんでその子がそんなことを言うのかもわからなくて、「そんな関係ないやん、同じクラスやから仲良くしようや」と返した自分の姿。工業高校に上がり、クラスに女子が5人いて、その内の4人が朝鮮人の子だった。「あんた日本人なん？」と言われ、私は日本人であるということ意識した事などそれまで一回もなかったと教えられた。今日、鹿児島島の報告で作文を聞いたが、その作文を聞かなければ、そのことに気づけない私たちってなんだろうって改めて感じた。学校の当たり前前の文化だったり、環境であったり、そういう仕組みがいかに当事者にとって生きにくさを抱えさせているか。じゃあ、その社会モデルとして、どんな風に学校が変わっていかねばならないのか。私たちはどうしていかねばいけぬのかということに立ち返った時、一つは、仲間同士つなぐということ。もう一つはやっぱり、人権教育をより確かなものにしていくことだと、二日間改めて感じた。

大阪 今日印象に残った言葉、「教育はオーダーメイド」。校長の立場で、107名しかいないうちの学校で、できるだけ声を掛け、思いを聞いている。全員名前も分かるし、声をかけられる。「あの子、今日

親いなかったで」とキャッチするとすぐ、人担、同担が動き、聞きとり、うちの人に返していく。また元担任であったり、兄弟関係であったりする人が、こんなこと言っていたよと伝えてくれる。そうやって人間関係、先生たち同士の思いも聞きながら一緒にやっていくということが大事。その中で地域の力も借り、合わせながらつくっていく。そういうことを子どもたちに返していきたい。107人の子どもたちのうち40名以上が外国人。日本語指導が必要な子どもが10名ぐらいいる。その子たちのニーズも聞かなあかん。そんなこともキャッチし、全ての子どものいろんなニーズを聞いていく。それができるような学校でありたい。

大阪 正直、つながるって難しいと思っている。小学校からなかなか学校に来られず、中一で担任をした子どもがいた。一学期、テストが近くなって、テストがあるから来てねって、範囲表を渡しにだけ行った。なんこれしよったろって。テスト受けられるわけがない。二学期からその子と親と相談し、毎日、夕方、夜、家庭訪問して、漢字と数学の勉強をした。二学期のテストで漢字が解けたり、数学の計算が少しできたりして、顔が明るくなり楽しそうになった。途中、職員室の隣の先生から「それ毎日続けるん？」「じゃあ、その子3年間持つと？」「先生が異動したときどうなる？」と言われ、思いをつなぐって難しいと感じた。運動体の支部に行き、人権学習のときだけ相談して、そこの学習会に参加したときの「やっぱり先生たちは先生なんですね」という言葉もずっと残っている。一人の人間としてそこに参加し、たわいのない話をしながら、その人を知っていく。一人の人間として、中一のときに関わっていた子に、中二、中三と自分ではできているのか。それは実際、物理的にできていない。教育の難しさということを中心に考えさせてもらった。

大阪 今、大阪市の近隣にくる外国から来て、日本語がまったくわからない子どもたちに日本語を教える仕事をしている。すごく多い。子どもたちは言葉がわからなくても、ありとあらゆる方法を使って、沢山伝えてくる。学級よりは人が少ない4、5人の教室で、教えることは1週間に1回ぐらいしかできないが、めいっぱい自分の気持ちを伝えてくる。私ができることと言えば、聞いたことを担任の先生にどうつなぐか。一番この子たちが長時間いる場所で、自分の居場所となってほしい所がまだ居場所ではなく、日本語教室が居場所となっている。本来の学級、学校に戻していくために、自分が子どもたちから聞いたことを、子どもの代弁者として連絡帳に書いたり、どう巧く伝えたりできるかとずっと悩んでいる。担任の先生には質問できない子どもたち、先生忙しいからと言って、連絡帳ひとつ見せられない子どもたちを、どうクラスに、学校につなげるかというのが自分の大きな課題。

Ⅲ まとめ

協力者 同和教育の基本的な理念として「仲間づくりに始まり、仲間づくりに終わる」ということがあります。学校教育において、この言葉は単なるスローガンではなく、変わらない実感的な環境として公教育が保障してきたものではないでしょうか。

私たちは、あらためて、リアルに存在する子どもたちと関わり、信頼関係を築き、確かに個や集団が変容することを認め合うコミュニティの姿とその高い有効性を実践の中から学びました。

報告者自身の多様にかかわり合う中で大きく変容していることをあらためて想起した場面もありました。自身が変容していくきっかけには「出会い」が数多くありました。その要因は先輩たちをはじめとする人である場合もあります。あるいは、人権課題となりうる差別事象との出会いも同じであると実感できたところです。

ひとり一人の人権意識の高揚も、社会や小集団の中での人権教育の創造も、孤立した個人の中では完成しないでしょう。

多様なコミュニティに関わりをもっている私たちが、リアルに、それぞれの社会と「つながる」ということ、教育によって、学校や地域をリアルに「つないでいく」という意志を強くして、具体的な行動としてリアルにつなげていくことこそが、求められる人権教育の一つの形なのではないかと確信することができました。

加えて、子どもたちとの確かな信頼関係をもとにしたコミュニティを構築しようとするとき、教員をはじめとする大人たちが、「よいー悪い」「できるーできない」に代表されるような二項対立的判断基準を強要して、無意識に子どもたちの価値観にバイアスをかけてしまい、子どもたちの意志や自治意識を阻害してしまい、ほんとうのコミュニティを築き上げることを遅らせるか、妨げていることがあるのではという、視点を得ることができました。

地域のみなさんから、「差別をしない子どもたちを育ててください」という強い願いを受け取りました。もう一度明日からの私たちの行動の指針として確認しておきたいと思います。